

独立行政法人 経済産業研究所 (RIETI)



BBLセミナー プレゼンテーション資料

2014年9月4日

「電子書籍のある世界」

藤井 太洋

<http://www.rieti.go.jp/jp/index.html>

電子書籍のある世界

“A World with eBooks”

2014年9月4日

藤井太洋

1971年 鹿児島県奄美大島生
2012年 “Gene Mapper”出版
同年 Kindle文芸・小説販売数1位
2013年 『Gene Mapper -full build-』
2014年 『オービタル・クラウド』



電子書籍の現在

- ・ **従来書籍の電子化**

新刊書籍の20%を越える電子化が実現しつつあり、過去作品も徐々に電子化が進んでいる。

- ・ **リフロー型テキスト／全面画像**

ツールの普及でAmazonやiBooksではハイブリッド型のグラフ誌も投入されはじめている。

- ・ **マルチデバイスの普及**

デジタルペーパー専用リーダー／スマートフォン／タブレット／PC専用アプリケーション／Web… インターネット接続のできるほぼすべての端末で利用が可能になりつつある。

- ・ **国内出版市場の10%を越える普及**

推計1,800億円(全体を1.8兆円として)に達し、ガラケー時代の電子配信を越えた。

電子出版行為者

- ・ **大手出版社**

出版流通の口座を持ち、恒常的に書籍を出版している企業群。電子書籍流通に、従来とほぼ同様のフローでデータを提供している。

- ・ **中小／地方出版社**

流通を使うもの、個人出版と同じ方法を用いるものなど多様だが、制作費用を越える売り上げが見込めないことから、参入には積極的でない。

- ・ **個人**

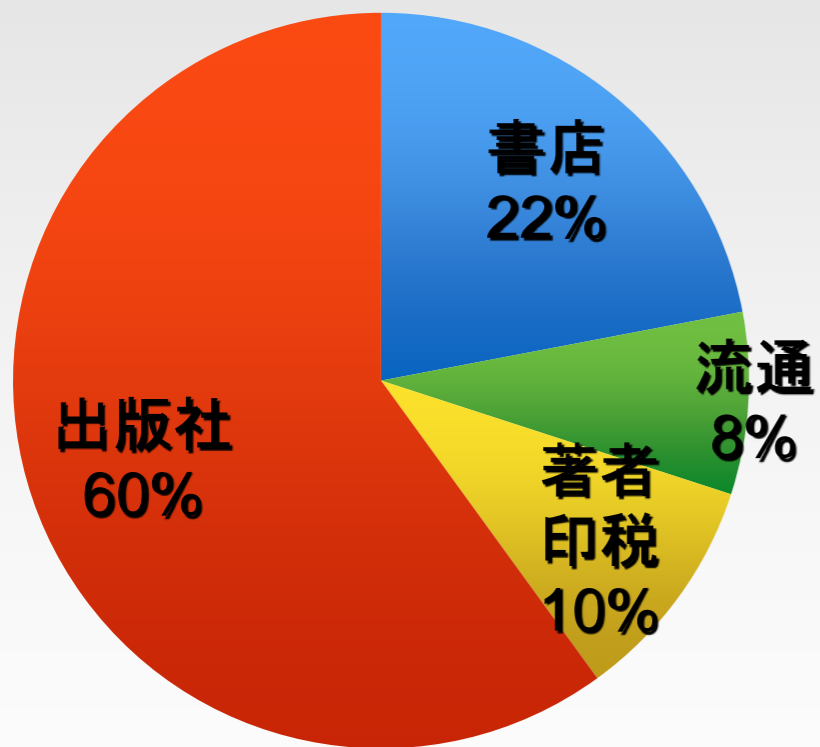
KDP、iTunes、楽天Koboなどのセルフ・パブリッシングチャンネルへ登録して出版を実施している。推計だが、KDPには国内で一万近いセルフ・パブリッシャーが参加している。

- ・ **機関**

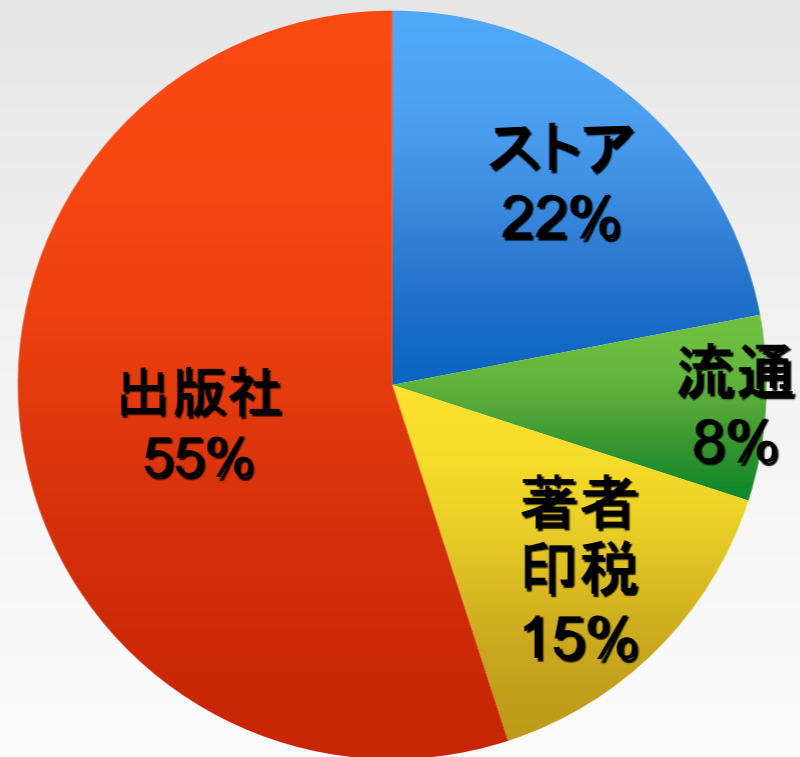
白書の電子出版は、PDFの公開などで元年以前より盛んに行われているが、その他は限定的。国土地理院、また研究機関の論説集、調査報告書などの登場が待たれる。

収益の違い

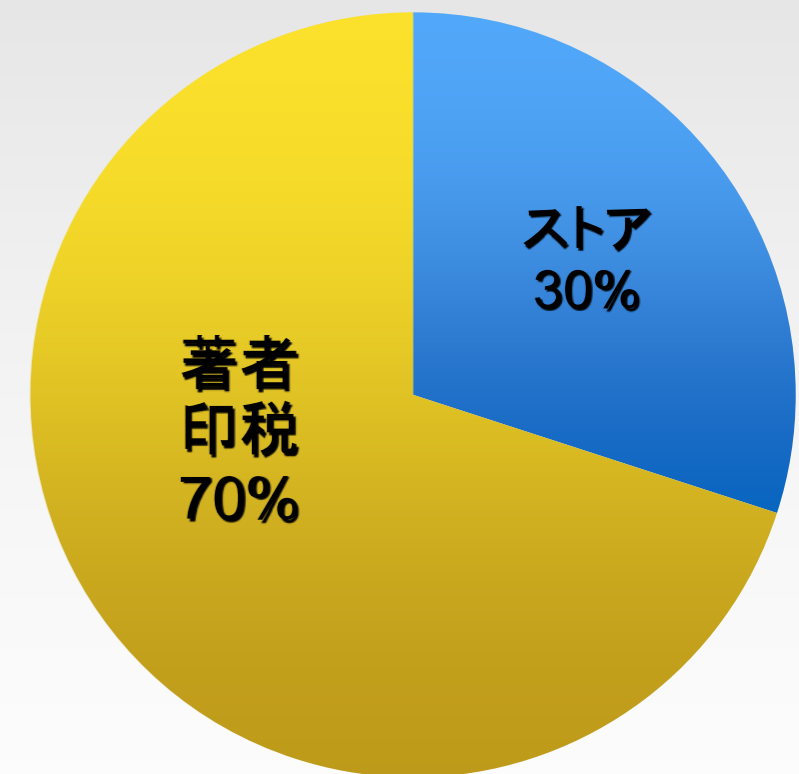
伝統的な書籍



「電子書籍」

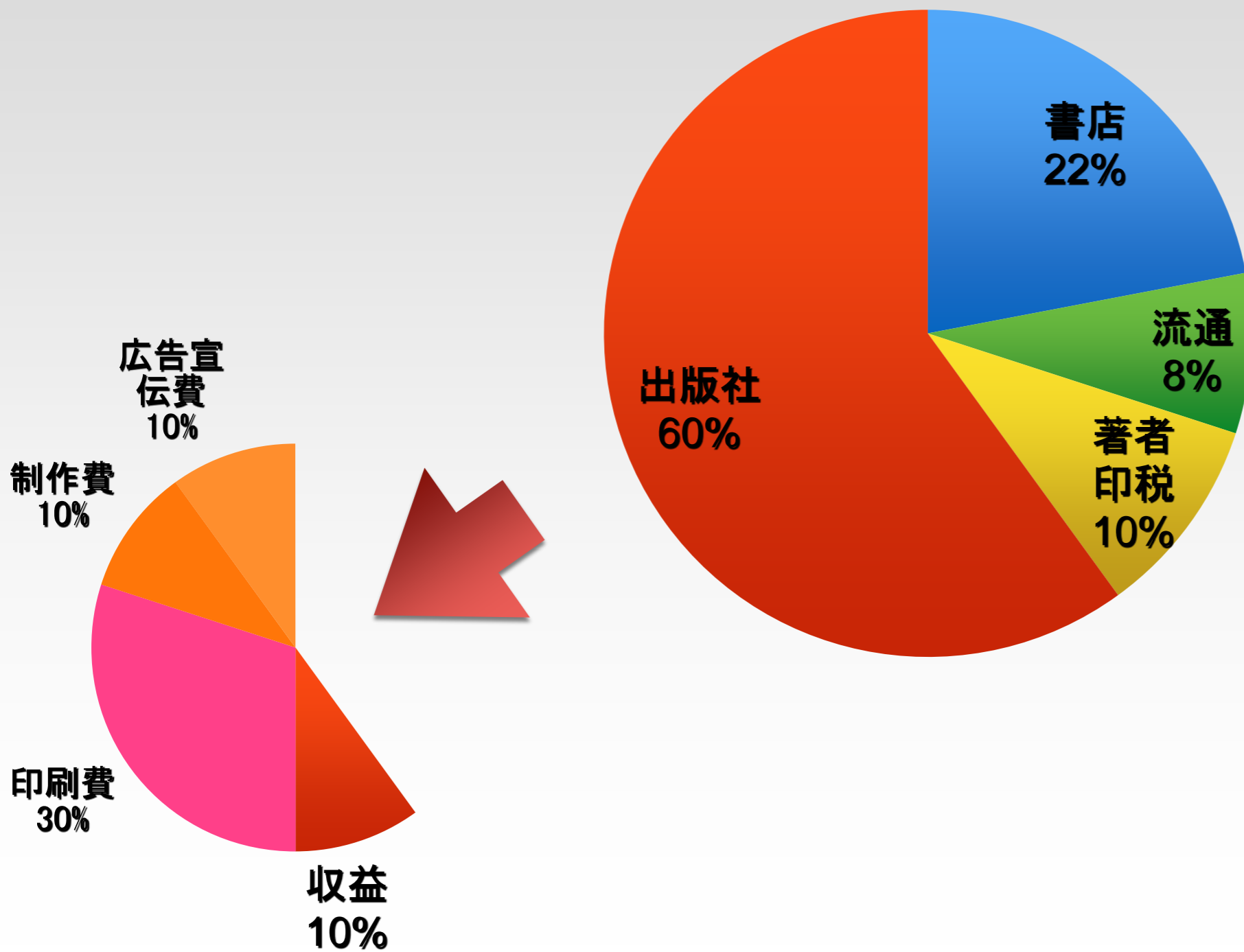


電子書籍のセルフパブリッシング



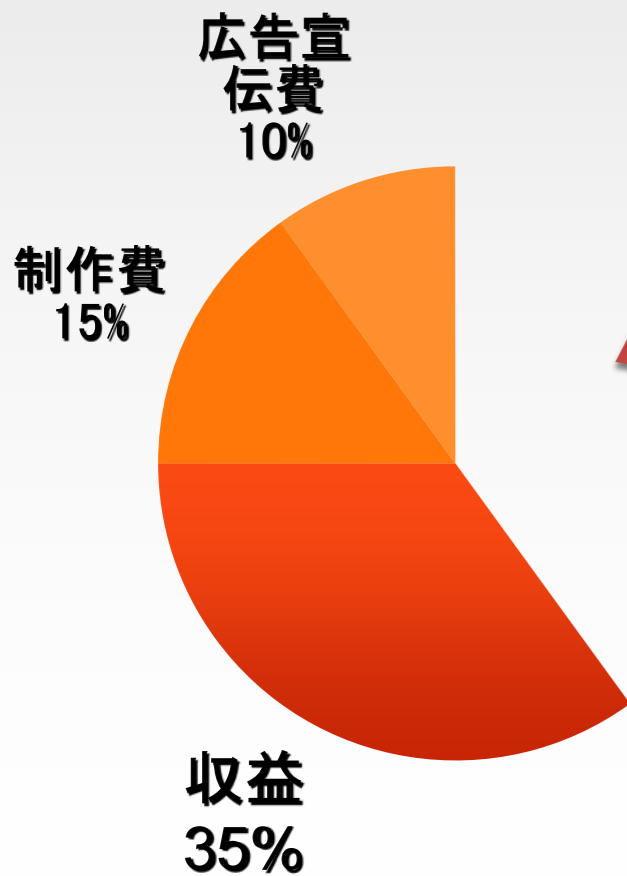
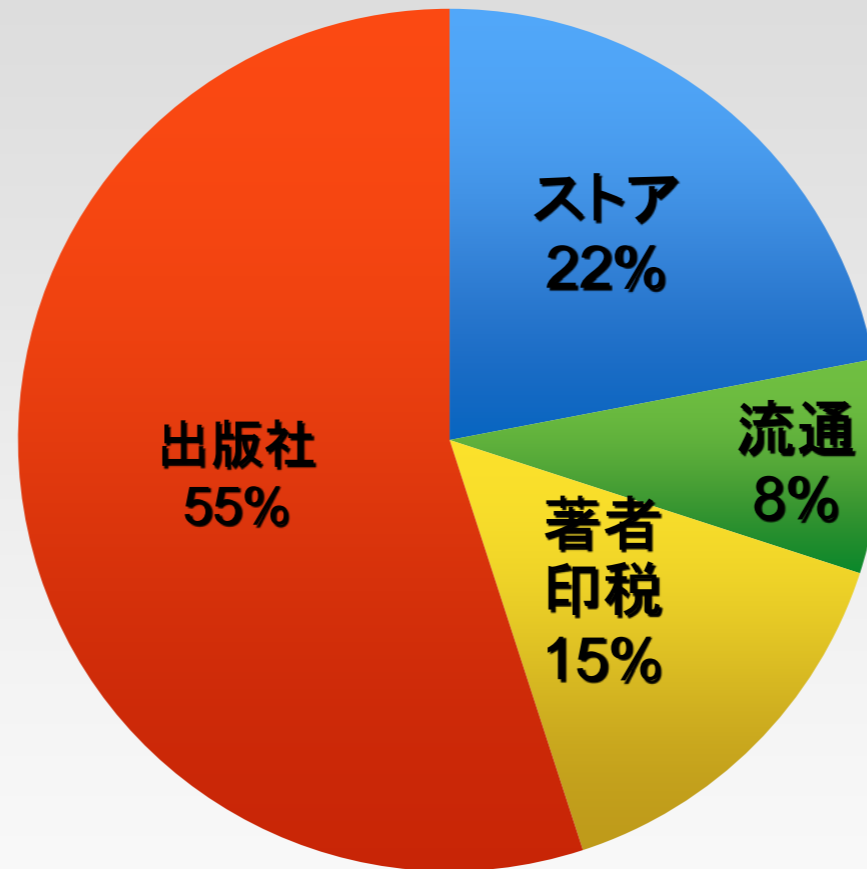
収益のシェア

伝統的な書籍



電子書籍

「電子書籍」



印刷と「本」

百万等陀羅尼 国立国会図書館画像サービス



・ アジア圏の印刷物

西暦400年頃から、木版による經典の印刷が行われていた。現存する最古の印刷物は西暦700年に木版で印刷された法隆寺の「百万等陀羅尼」

・ 写本から活版印刷へ

1455年 グーテンベルグの42行聖書が印刷される。組み替え、再利用可能な「活字」が利用された

・ 写本の複製

揺籃印刷本(インキュナブラ)と呼ばれる



Wikimedia commonsより

アルド・マヌーツィオ

Wikimedia commonsより

- ・ 1494年 アルド印刷所創設
ゲーテンベルグの「42行聖書」(1455年)から遅れること半世紀
- ・ 標準活字、ページ番号、装飾活字(イタリック体)の発明
- ・ 「本」の発明
過般型の書籍が生まれた。大判の印刷原紙を折って断裁する折りには今もマヌーツィオが考案した手法が使われている



「底本」ありきの電子書籍

- ・ 「電子化」の示す意味

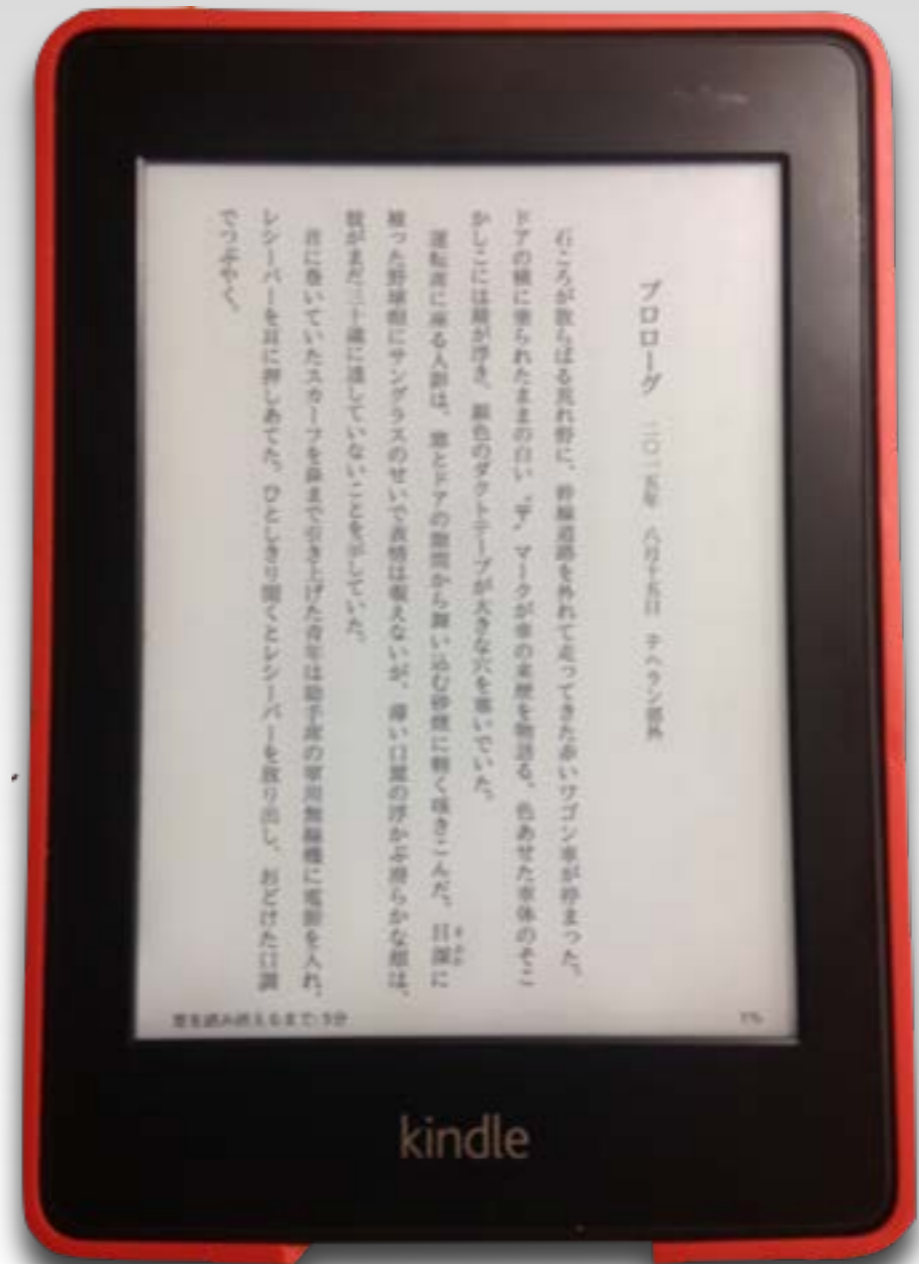
印刷書籍を電子的に再現している状態。インナキュブラの時代と変わらない。

- ・ 紙ありきのワークフロー

DTPによって紙の書籍をつくり、そのデータから「電子書籍」を作るため、DTPの表現力によって制限がかかっている。

- ・ 紙ありきのビジネスモデル

定型化した著作権利用料＝印税と取次、書店モデルから抜け出せない。



新たな読書体験

- ・ **まず「紙の本」を越えよう**

DRMによって移動できない「本」が増える。ストアを選ぶことが、本棚を決めることと同じ意味を持ってしまっている。

- ・ **ソーシャルリーディング**

評価に値するレビューと注記による、交流的書籍体験。これも電子書籍プラットフォームで分断されている。

- ・ **検索・引用**

検索、引用のできない「本」がライブラリの多くを占めている。

新たな執筆体験

・ 投稿型執筆環境

「小説家になろう」や「エブリスタ」のような投稿型サイトに投稿される作品は、かつてのケータイ小説サイトを、質、量ともに越え始めている。大手では執筆者へのリターンもはじまり、副業から正業へ転換する著者も登場している。

・ Web文化からのコンテンツ発信

Web文化を色濃く持つ企業は、マイクロコンテンツからのテキストコンテンツ発信機能を持ち始めている。属人性の高いブログから、コンテンツを主体とした「Medium」へ。日本では課金も可能な「note」などが登場している。

・ 企画が追いついていない

コンテンツの配信と収益を著者、編集者、作業員へコミットする新たな動きは、まだ登場していない。